

野外教育施設における宿泊室の年代変遷に関する研究 ～『新建築』に掲載された 30 施設を対象として～

A study on the Age Transition of Accommodation Room in Children and Youth Facilities for Outdoor Activities
As the Target building of 30 Works Appeared in 'Shinkenchiku'

○山本哲也¹, 山中新太郎²

*Tetsuya Yamamoto¹, Shintaro Yamanaka²

This research analyzed the placement and area of accommodation rooms in outdoor educational facilities. We classified the type of placement as "aggregate", "connection", "dispersion". In the flow of the times, the arrangement of the types have changed. The area of the accommodation room has grown. The reason is the efficiency and comfort of buildings.

1. 序論

1-1. 研究の背景と目的

日本では 1950 年代から 1970 年代の高度経済成長に伴う急激な都市化・核家族化などの社会背景により、教育分野における野外教育の必要性が問われてきた。当時の文部省はそのような需要に合わせ、施設整備の国庫補助を開始し^[1]、1970 年から 1990 年にかけて野外教育関連施設は建設の全盛期を迎えた。それから 40 年弱の時を経た現在、野外教育を取り巻く社会環境は大きく変容したといえる。

本研究では、野外教育施設の宿泊室に注目し、時代の変遷と合わせて分析をすることで、これまでの野外教育施設の傾向を明らかにすることを目的とする。

1-2. 研究対象と研究方法

研究対象は宿泊室がある野外教育施設とし、『新建築』の 1970 年以降に掲載された 30 作品を抽出する^[2]。

研究方法は、資料作品の建築図面から機能配置・面積を、施設ウェブサイトから宿泊室の種類・定員を読み取り、宿泊室の配置による分類をし、年代変遷と合わせた分析を行う。

1-3. 本研究の位置づけ

佐久間らの研究^[3]では野外活動施設の施設内容と周辺環境について、施設に対するアンケート調査結果をもとに分析を行っているが、宿泊室や年代変遷については明らかでなく、建築図面による分析も行われていない。

本研究では、野外教育施設の建築的特徴が宿泊室にあると仮定し、年代別に調査することで、どのような背景や設計意図によりこれまでに変化が生じてきたのかを明らかにする。

2. 野外教育施設の概要

2-1. 機能構成

野外教育施設は基本的に 3 つの機能部分によって構成されている。1 つ目は施設管理に必要な事務室・宿直室・機械室などの管理機能、2 つ目は野外活動や学習に必要な体育館・研修室・工作室など活動機能、3 つ目は日常生活に必要な宿泊室・トイレ・食堂・浴室などの生活機能である。

2-2. 宿泊室

3 項目の機能の中で管理機能と活動機能は野外教育施設以外の教育施設においても同様にみられるものである。野外教育施設の特徴は生活機能にあり、その中でも宿泊室は日常生活の拠点となり最も注目されるべき部分である。子どもが宿泊することを想定した宿泊室のほかに引率者専用の宿泊室も存在し、その定員は 2 名から 20 名程度の範囲である。

3. 宿泊室配置の分析

3-1. 宿泊室配置の類型

宿泊室の配置タイプは宿泊室とその他機能との位置関係によって 3 項目に類型化する^[4]。その模式図を Fig.1 に示す。

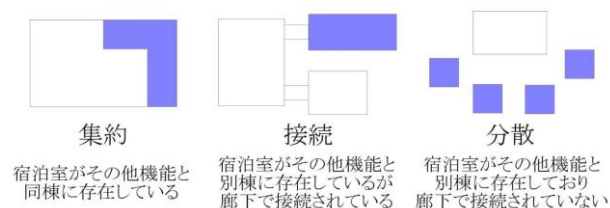


Fig.1 宿泊室配置の類型化模式図

野外教育施設の年代分類については研究対象である竣工年が 1970 年から 2017 年までの施設を 1970 年代、1980 年代、1990 年代以降の 3 項目に分類する。

3-2. 年代別の宿泊室配置タイプ

全年代の宿泊室配置タイプの割合と、それぞれの年代別の宿泊室配置タイプを以下グラフで示す。

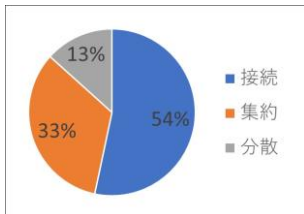


Fig.2 通年での配置タイプ

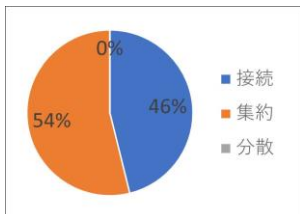


Fig.3 1970 年代の配置タイプ

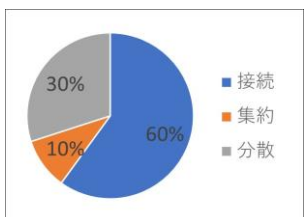


Fig.4 1980 年代の配置タイプ

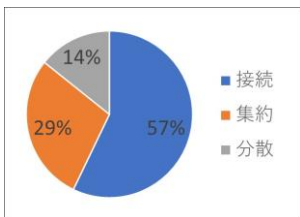


Fig.5 1990 年以降の配置タイプ

配置タイプ割合の分析より、全施設において接続が 54%と半数以上採用されていること、分散が 13%と少数であることがわかる。年代別での分析より、1970 年代では集約が 54%と過半数を占め、分散はみられなかったが、1980 年代になり集約が極端に減少し、分散も多く見られるようになった、1990 年以降では全年代の割合構成と似たものとなった。

3-3. 宿泊室配置の推移

最初の 1970 年代では集約が過半数を占める、1980 年代には減少し、分散が増加したことから、野外教育において、野外に対する開放性・親和性という特徴がある分散が集約よりも多く採用されていったのではないかと推察する。その後、1990 年以降では分散が減少するが、これは分散施設の管理の困難さからその数が減少し、集約と分散の両方の特性を併せ持った接続が増えていったのではないかとと思われる。

4. 宿泊室面積の分析

4-1. 宿泊室の平均面積と単位面積

宿泊室の面積と、部屋面積を定員で除して求められる定員 1 人あたりの単位面積について Tab.1 に示す。宿泊室の面積分析より、1970 年代の部屋面積が 23.6 m²と最も狭く、1980 年以降は 33 m²程度であり変化がな

いことがわかるが、1980 年代から 1990 年以降において 1 人あたりの部屋面積が 4.0 m²/人から 4.9 m²/人へと大きくなっていることがわかる。

Tab.1.年代別宿泊室面積表

	宿泊室平均面積 (m ²)	宿泊室平均単位面積 (m ² /人)
全年代	31.0	3.9
1990年以降	33.7	4.9
1980年代	33.3	4.0
1970年代	23.6	3.1

4-2. 宿泊室面積の推移

面積の分析においては、1970 年代から 1980 年代にかけて宿泊の快適性などの理由により部屋面積が広がったことが考えられ、それ以上の拡張に関しては建築規模などの理由によって必要性がなかったのではないかと考える。しかし、1980 年代から 1990 年以降において部屋面積自体は大きく変化していないものの、定員 1 人あたりの面積が増加していることから、宿泊に対する快適性は向上しているものとする。

5. 結論と展望

野外教育施設の宿泊室は、基本構成について大きく変容はしていないものの、宿泊室の配置と面積において時代の移り変わりとともに変化していることがわかった。保守管理や動線の効率、利用者の快適性を向上させていった結果ではないだろうか考える。

野外教育施設が出現してきた 40 年前より社会背景も大きく変化している現在においては主な利用者である子どもが少子化によって減少している。建築として効率や満足度を高める他に機能や用途において変化していくことが求められる。

6. 参考文献

- [1] 文部科学省:「青少年教育に関する施策の流れ」, <http://www.mext.go.jp/>, 2017 月 9 月 17 日閲覧.
- [2] 新建築社:『新建築』1970 年 9 月号~2015 年 11 月号
- [3] 佐間治, 仙田満, 千葉洋:「野外活動施設の施設内容および周辺環境に関する研究」, 『日本建築学会計画系論文集』, 517 号, pp.151-156, 1999 年.
- [4] 津端宏, 山本直人, 建築思潮研究所:『建築設計資料 6 保養・研修・野外教育施設』 pp.14-15, 1995 年